



TITLE:

## 社會的文化的變動の形式(二)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

---

CITATION:

米田, 庄太郎. 社會的文化的變動の形式(二). 經濟論叢 1938, 46(3): 387-402

ISSUE DATE:

1938-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131073>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號三第

卷六十四第

行發日一月三年三十和昭

## 論叢

謂はゆる預金通貨の公式について……………

經濟學博士

小島昌太郎

共同體思想の國民的性格……………

經濟學博士

石川興二

社會的文化的變動の形式……………

文學博士

米田庄太郎

歐米に於ける日本學研究に就いて……………

經濟學博士

本庄榮治郎

## 時論

農地調整法案に就いて……………

經濟學博士

八木芳之助

## 研究

經濟擴張の理論……………

經濟學士

飯田藤次

貸借對照表分析論に關する若干の問題……………

經濟學士

岡部利良

## 說苑

戰時に於ける女子勞働……………

經濟學士

大塚一朗

勞働市場分析の一例……………

經濟學士

菊田太郎

大量觀察法に關する一著作……………

經濟學士

有田正三

## 附錄

雜報・外國雜誌論題

(禁轉載)

# 社會的文化的變動の形式(二)

米田 庄太郎

## (一)(二)

ウォームの社會進化形式論と夫れの批判(前々號掲載)

ソロキンの社會的文化的過程形式論と夫れの評價

I、ソロキンの社會的文化的過程形式論の概要(本號掲載、但し最後の部分は次號に譲る)

II、ソロキンの社會的文化的過程形式論の評價

## (二) ソロキンの社會的文化的過程形式論と夫れの評價

私は是れより前節の終りに述べし二つの根本的問題に特に注目しつゝ、ソロキンが昨年公にせる大著述「社會的及び文化的動學」(第一卷七百四十五頁、第二卷七百二十七頁)(第三卷六百三十六頁、第四卷未刊)に於て、論述して居る社會的文化的過程形式の理論を考察し、評價したいと思ふのである。但し彼は此の理論に就ては、詳しくは特に第四卷に於て論述することとして居るから、同卷がまだ刊行されて居ない今日に於ては、彼の思想を十分に詳しく學ぶことは出来ないが、併し既刊の第一卷第一部序論中に、カナリ詳しく論述されて居る其の概要によりて見るも、彼は是れまでまだ何人も企だてゝ居ないほど精確に、社會的文化的過程の概念を分析し、規定し、究明し、隨ふて又其の諸形式を詳しく分類し、規定しようと企だてゝ居るとは、明かに學ばれるのである。そうして其の點に於て彼の社會的文化

的過程の理論は、現今の社會學に於て特に注意さる可きものであると思はれる。是れ現今の社會學に於ては、社會的文化的過程問題は社會學の最も重大なる問題の一と認められて居るに拘らず、否な此の問題は社會學の最根本的問題であるとさへ主張する人々のあるに拘らず、まだソロキンほど夫れの概念及び形式を精確に規定し、組織的に詳しく論究した人はないと思はれるからである。尙ほソロキンの同書は随分高價なものにして、我國では誰れでもたやすく手に入れると云ふことは、困難であらうと思はれるから、此處に彼の社會的文化的過程論に就て、少し詳しく述べて置きたいと思ふ。

## I. ソロキンの社會的文化的過程形式論の概要

### (1) 社會的文化的過程の概念の精確な規定

今ソロキンが彼の大著作「社會的及び文化的動學」に於て、研究の主要關心事或は主要問題として居るのは、社會的文化的動搖或は變動 *sociocultural fluctuations* 即ち社會的及び文化的生活に於ける、かくて人類史に於ける、再起的或は回歸的或は反復的諸過程 *recurrent processes* である。されば彼は先づ第一に、過程とは何であるかを精確に規定することが肝要であると考へ、先づ一般的に左の如く規定して居る。即ち此處に用ひられる意味に於ては、過程とは時の進行中に於ける、一の與へられたる論理的主體の運動或は變更或は變形或は「變轉」或は進化の何れの種類をも、要するに空間上の地位に於ける變化であるか、或は量的或は質的諸方面の變更であるかを問はず、總て何れの變化をも意味するものである。何れの過程も時間及び連續を含み、時間範疇から離し得られない、又夫れなくば考へ得られないものである。かくて何れの過程も「より早き」型、或は「前」後

型に従ふて、相互に接合する諸區分或は諸節に分ち得られ、且つ他の諸過程、及び同じ型或は範疇に従ふて分ち得られる其等の諸過程の諸區分或は諸節と、同時性の範疇に従ふて結び附け得られるのである。

ソロキンは先づ右の如くに過程の概念を一般的に規定したる後、更に詳しく過程概念を分析して居るのであるが、其の論ずる處によると、何れの過程も眞實な意味を有する爲めには、(1)夫れの單位、即ち變動しつゝある、或は過程の中にある論理的主體、(2)夫れの時間關係、(3)夫れの空間關係、(4)夫れの方向等に於て、精確に決定されなければならぬ。

先づ過程の單位或は論理的主體に就て考へるに、夫れなくば何れの過程、何れの動的狀態も觀察し得られず、考へ得られず、記述され得ない。そうして其の單位は一の事物でも、亦一定の動的狀態でもあり得る。何れにして一定の單位が論理的主體として與へられて居なければならぬ。更に其の單位は過程の中にある、或は變動するのであるが、しかも全過程を通じて、自己の同一性を固持して居ると考へられねばならぬ。何れの單位或は主體も、夫れの同一性を保持する限り存在し、夫れの同一性を失なへば、單位としては、或は同じ論理的主體としては、直に存在しなくなる。そうして其の場合には、夫れは何れの過程或は何れの變動の中にもあることが出来ない。是れ不存在者は變動することも、不變的に存続することも出来ないからである。變動するものは何であらうとも、只變動するもの其物が夫れの同一性或は存在を保持し、夫れが通過する過程を通じて同一であると認められる限り、吾々は夫れの變動を云々し得るのである。但し永續的同一性と變動との此の調停は、一見して感ぜられる程不理論的なものでない。若し變動の單位Aが、a b c等の本質的諸要素と、夫れに附け加はる非本質的な

他の諸要素とから成立して居るとすれば、 $a, b, c$ 等の本質的諸要素の總合としてのAが恒定的であると同時に又、非本質的諸要素との關係に於て、變動の過程中にあり得るので、かくてAは夫れの同一性を失なはずして變動し得ると云ふ事實を基礎として、此の調停は成就されて居るのである。そうして是れが即ち吾人の常に記憶して居なければならない、不變性と變動との統一化の論理である。

次に吾人の注目すべきは、存在に對立する何れの生成、變動、過程運動、動的狀態も時間を含んで居ると云ふことである。此の第二の規定なくば過程は考へられることも、亦記述されることも出来ない。時間は一の過程の始め及び終り、夫れの連續、他の諸過程との關係に於ける夫れの地位(以前とか、同時とか、以後とか云ふが如き)、夫れの速度、夫れの方(過去から現在へ、現在から將來へ、或は其の逆の如き)、及び其他の重要な諸特性を明示する爲めに、必要缺く可からざるものである。併し過程の種類に従ふて時間の種類が異なつて居る、かくて物體運動を記述するに適する時間は、社會的文化的變動を記述する爲めには、屢々不適當である。そうして夫れが爲めに特に社會的時間の新しい範疇を構成することが必要である。

以上時間に就て述べしことは、必要な變更を加へて、空間にも適用される。何れの過程も何處かで、又對照點として選ばれたる他の諸過程及び諸現象との空間的關係に於て、生起するものである。然らざれば過程の地位は決定されず、漠然たらざるを得ない。併し此處に注意すべきは、物理的或は幾何學的空間及び夫れの坐標系、即ち力學のヴェクトルは、物體の空間的關係の記述にはよく適當して居るが、併し心理的社會的諸過程及び文化現象一般の記述には、屢々全然不適當であると云ふことである。

多くの社會科學者はまだ此の事をよく意識せず、今尙ほ文化過程の地位決定の爲めに、物理的空間坐標系を用ひて居る。そうして當然ある可き如くに失敗して居る。但しかゝる企てには物理化學的諸科學及び數學的力學的知性が、大に勢力を振ふて居る今日の時代に於ては、恕せらる可き點がある。

かくて實際上多くの社會的文化的現象を充當的に記述する爲めには、吾々は特異な坐標系を俱備する社會的空間の特殊な一範疇を構成しなければならないのである。

終りに過程の精確な規定に必要な第四の本質的要素即ち方向は、總て過程は或物から或物へ進行する、或は變動は一の狀態から他の狀態への移行を前定すると云ふ事實に基いて、成立するものである。何れの動的狀態も「から」From-Toの範疇に於ける單位の或變更を意味するものであるが、此の「から」運動 From-To movement が即ち過程の方向である。そうして過程の方向は種々様々であるが、大體上時間的方向、空間的方向、量的方向、及び質的方向の四部類に區別し得られる。

今過古から現在までとか、中世紀から器械時代までとか、西紀前二千五百年から西紀後千九百三十三年までとか、午前六時から午後六時までとか云ふ言述の中には、時間方向が含まれて居る。但し此の時間方向は「から」まで「或は」からへと云ふのは異なる言葉、例へば「前後」とか「の間」とか「何年間」「何日間」「何時間」とか云ふが如き言葉でも云ひ表はし得られる。併し實際上此等の言葉は同一の「から」へ「或は」から「まで」の範疇の諸方面を意味するものであることは明かである。尙ほ過程の時間規定は最も屢々持續或は連續の形式に於て表はされる。多くの過程にありては、夫れは何代間、何年間、何時間、何秒間持續したかを知ることが必要である。此の事は只理論上に於てのみならず、實際上に於ても、屢々甚だ肝要である。更に二つ或は夫れ以上の過程の比較的持續を知ることが屢々必要である。又過程が再起的或は反復的である場合には、吾々は再起或は反復の期間の長さに就て色々知らねばならぬ。例へば其の長さは常に同一であるか、又は公式化し得られる規則に従ふて増減するか、又は全く非週期的にして毫も規律性を有しないか等々を知らねばならぬ。時間方向の他の種類は時間順序或は繼續順序である。例へば事物或は形質或は出來事 a b c d が與へられるすると、其等のものの何れが最初に起り、何れが夫れに次て起り、何れが

最後に起るか。つまり其等のものの時間に於ける順序はどうであるかを知ることが肝要である。以上述べしが如き形式や、更に他の多くの形式に於て、過程の方向の時間規定は吾人が理論的目的の爲めか、又は實際的目的の爲めに、認識せねばならない最も重要なものの一である。そうして總て此等の時間規定は時間方向の諸變種である。尙ほ時間方向は空間方向か、又は量的方向か、又は質的方向かと結合して、過程の速度或はテンポ或は律動と稱せられる處の累積的諸方向の一列、或は結合されたる派生的諸方向の一列を産出するのである。

過程の方向の第二の形式は空間的方向である。そうして夫れは純幾何學的空間的方向と社會的空間に於ける方向とに分たれる。但し社會的空間に於ける方向とは、例へば「社會的梯子をの攀ちぼること」とか、社會的昇進及び落下とか、社會的接近或は和合及び社會的分離とか稱せられるものに於て、見られるが如きものである。

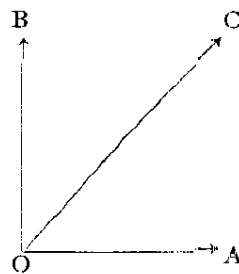
過程の方向の第三の形式は量的方向である。過程が増大するとか減少するとか、増減せずに續行するとか、又は生長し増進するとか、減退するとか云はれる場合には、夫れの方法は純時間的でも、純空間的でもなく、一の特異なもの、あるがまゝの單位の量的變化を表示するものにして、かくて量的方向と稱せらる可きである。そうして量的方向は文句的と數学的とに分たれる。例へば單に或物が増加するとか減少するとか、言葉の上で云ひ表はされるに止まる場合には、量的方向は文句的であるが、之れと異なりて、出生率は千人に就て十人から九人に減少するとか、自殺率は一萬人に就て〇にから〇に増加すると云はれる場合には、量的方向は數字的であるのである。

終りに過程の方向の第四の形式は質的方向である。即ち過程の方向は一の質的狀態から他の質的狀態へ、例へばゴチック建築式からバロック建築式へ、或は自由經濟組織から統制經濟組織へ移り行くとか云ふ意味にて、質的方向と稱せらる可きである。かゝる方向は心理的社會的及び文化的現象が取扱はれる場合には、甚だ意味深き、又方向の一切の種類の途中で、恐らくは最も重要なものと認めらる可きである。此處に吾人の注意す可きは、質は量に還元され、かくて質的方向は量的方向に還元され得ると云ふヘーゲルによりて是認された思想である。此の思想は今日も尙ほ汎く行はれて居るが、併し吾々の見る處によれば、此の思想は本質的には基礎のないものである。質が量の言葉で記述され得る小數の場合に於てさへも、よく注意して吟味すれば、質が量的公式中に潛入して居ること、又其の中に朦朧として現はれて居ることが、發見される。視覺に於て赤と青と綠とを辨別し得ない様な人々に對しては、其等の色に夫れ夫れ相應するエーテルの振動數及び波長の公式は、其等の色に就て何等の觀念をも與へることが出来ない。心理的社會的質の最も多くのものに於ては、量的記述は無用であつたが、恐らくは常にそうであるであらう。



是れ一部分は此等の質は量的測定の單位を全く有せず、又一部分は社會的及び文化的諸科學の骨組みをなす基本的諸範疇は、主として質的なものであるからである。物理學の空間及び時間とは異なつて、社會的空間、社會的時間及び其の他の社會的範疇は質的であるほど量的であるものでない。そして只此の理由のみによりても、社會科學に於ては質を量に還元することは不可能であるのである。併し夫れは決して量の範疇は、社會科學から排除する可きものであると云ふのではない。否な量の範疇はさきに述べし處によりて明かに學ばれる如く、心理的社會的現象の重要な一方面、量的方面を表示するものである。併し只此の一方面を表示するだけに止まる可きもの、決して他の諸方面を、殊に質的方面を吸収す可きものではない。

尙ほ此處に方向に關して注意されねばならぬ一の事實がある。夫れは方向の「向き」*senses*である。今力學に於てはベクトルの三つの空間的方向の各々は、二つの「向き」を有つて居る。例へば下の圖に於ては、OからBへ及びBからOへの二つの向き、OからAへ及びAからOへの二つの向き、OからCへ及びCからOへの二つの向きが、夫れ夫れ存立するのである。さ



れば社會的文化的過程の四つの基本的方向の各々も亦、種々な向きを有し得るのである。

處で社會的現象のベクトル系は、力學の夫れよりも無限に複雑であるが故に、（但し力學は只空間的ベクトルを有空間とは比較にならぬほど單純なものである。社會的空間は只三次）其の諸方向の各々は只二つの向きを有するだけでなく、遙かに多くの向きを有する。殊に質的方向はそうである。質的方向は可能的には、不可還元的な種々な質の

數のあるだけの向きの數を有するのである。又量的方向は増加、減少及び恒定の三主要「向き」を有する。更に種々な方向の二つ或は夫れ以上の向きは、相結合して累積的向きを産出し得る。そして此等の混合的或は累積的向きの數及び種類は可能的には無限である。併し其等のものの主要形式は、吾々が取扱ひ得るほどの數に還元

し得られる。そうして此のことは、何故に社會的文化的宇宙が、力學の物理的宇宙とは比較にならぬほど複雑であるかを説明する。尙ほ此の複雑性は只量的であるだけではなく、殊に質的であるのである。

ソロキンは以上述べ來れるが如くに、先づ過程一般の概念、及び夫れに従ふて社會的文化的過程の概念を、精確に規定しようと企だてゝ居るのであるが、次に彼は過程の單獨性或は唯一性或は一度性 (uniqueness) 及び再起性或は回歸性或は反復性 (recurrence) の諸形式及び度合を論究して居る。

(2) 過程の單獨性或は一度性及び再起性或は反復性のもろゝの

形式及び度合Ⅱ社會的文化的諸過程の單獨性と反復性

ソロキンの論ずる處によると、今吾々は a b c 等の諸特性を具有する一の過程或は現象 A を見出すが、併し如何に精しく探求するも、同じ a b c 等の諸特性を具有し、かくて A と同一である他の何れの過程或は現象をも、何れの場所、何れの時に於ても見出さないならば、其の過程或は現象 A は單獨的、一度的であると論結してよいと思ふ。之れと異なりて、吾々の探求が同じ a b c 等の諸特性を具有し、かくて A と同一である他の過程或は現象 B を見出すならば、A は單獨の一度的でない。夫れは B に於て再現して居る、かくて反復されて居る、或は再起である。されば總ての現象或は過程は單獨の一度的であるか、又は再起的反復的であるかである。併し過程の單獨性或は再起性は種々相異なる形式及び度合を有し得る。それで此處に單獨的及び再起的諸過程の主要な諸形式を、さきに述べし過程の精密な規定に準じて考察すると、大體上左の如き四種に分たれる。

A、絶對的單獨的過程

只一の單獨的個體に於てのみ起り、そうして時間及び空間に於て全然反復されない。

B、只時間に於てのみ再起的反復的なる過程  
ある。

只一の單獨的單位に於てのみ起るとして、空間に於ては單獨的であるが、併し其の單位に於て反復して起るが故に、時間に於ては再起的反復的である。

C、只空間に於てのみ再起的反復的なる過程

本質的に相互に類同的である二つ或は夫れ以上の諸單位の各々に於て、各々の生活時間中只一度しか起らない過程、即ち各單位の時間的存在に於

ては單獨的であるが、併し社會的空間即ち他の類同的諸單位に於ては反復される。

D、時間及び空間に於て共に再起的反復的なる過程

今何れの過程或は現象も、夫れが再起的反復的であるか、又は單獨の一度的であるかは、定義上から見て、夫れが他の現象或は過程に似て居るや否やによりて定まるのである。そうして論理的には同一性の概念は絶対的であるが、經驗的には夫れは相對的にして度合の差異を有する。かくて二つの過程或は現象が一切の諸特性に於て全く同様であるならば、其の場合に於ける兩者の同一性は完全であるが、此の完全同一性の状態からして、同一性遞減のもろ／＼の度合を通じて、兩者の完全なる不同性の状態に到達される。

#### A 過程

#### B 過程

完全同一性  $\begin{cases} 1. a, b, c, d \\ 2. a, b, c, d \end{cases}$

$a, b, c, d$   
 $a, b, c, e$

類同性遞減  $\begin{cases} 3. a, b, c, d \\ 4. a, b, c, d \end{cases}$

$a, b, c, f$   
 $a, e, f, j$

完全不同性  $a, a, b, c, d$

$e, f, j, m$

右の圖表によりて見れば、二つ或は夫れ以上の過程或は現象が同一的であるか、類同的であるか、不同的であるかは、先づ第一に其等の過程或は現象の同一的又は不同的である特性の數によりて定まることが明らかである。要するに他の條件が變らないとすると、同一的特性の數が大にして、不同的特性の數が小なるほど、其等の過程或は現象はますます同一性に近づき、逆の場合

合には逆である。併し同一的及び不同的特性の数が總ていあるのでない。寧ろ其等の過程或は現象の特質化に對する特性の本質性或は意義が一層重要である。經驗的現實態にありては、殆んど總ての過程或は現象は本質的諸特性と共に非本質的偶然的諸特性を併有して居る。そうして二つ或は夫れ以上の過程或は現象の同一性或は類同性に對しては、本質的諸特性が同一の又は類同的であることが、殊に必要であるのである。但し本質的諸特性とは論理的又は因果的に、或は一層適切に云へば論理的及び因果的に現象と不可離的であり、夫れなくは現象がある處のものではなくなる様な諸特性を云ふのである。併し只論理的にのみ本質的諸特性を見定めることは屢々不可能である。かくて夫れが爲めには注意深い經驗的觀察を、統計的、實驗的、臨牀的、歴史的等の一切の諸形式に於て巧みに運用することが必要である。そうして論理的に、因果的に、又は他の經驗的必然性によりて、比較される諸過程或は諸現象に、本質的であると認められる同一的諸特性の数が大なるほど、又不同なる本質的諸特性の数が小なるほど、其等の過程或は現象が益々接近的な同一性を有するのである。併し經驗的現實態に於て吾々の取扱ふ諸過程或は諸現象が完全に同一の場合も、亦完全に不同的である場合も、何れも甚だ稀れである。此等の兩極は寧ろ觀念的極限である。事實上では通常吾々はより大なる又はより小なる類同性或は不同性を現はす現象を取扱ふのである。そうして一定の諸過程或は諸現象が、夫れの本質的諸特性の總て又は大多數に於て類同的である限り、夫れは同様なものであつて、反復されて居ると認められ、之に反して何れの類同的な本質的特性をも有しない時には、類同的であるとは、隨ふて再起の反復的であるとは認められ得ない。そうして此等の兩極限の間に、類同性及び不同性の種々なる度合の存立する大なる餘地があるのである。

ソロキンは以上述べし如くに、過程の單獨性或は一度性及び再起性或は反復性のものゝ形式及び度合に就て、一般的に論述したる後、特に社會的文化的過程の單獨性及び反復性を論究して居るのであるが、彼は先づ社會的文化的過程は單獨の一度的であるか、又は再起的反復的であるかと云ふ問題を論究して居る。そうして彼の論述する處によると、社會的文化的過程は單獨の一度的であるか、又は再起的反復的であるかと云ふ問題は、今日社會的文化的諸科學間に於て、大なる勢力を振ふて居る處の、社會的文化的及び歴史的過程の單獨主義的或は一度主義的思想 the unicist conception 即ち歴史は決して繰り返さず、常に新しき或物にして、空間に於ても、時

間に於ても相互に類同的であると云ふ様な、二つの社會的文化的事物、價值、部類、事件は決して存在しないと云ふ思想に對しては、重要な一問題である。今かゝる單獨主義的思想の中に或眞理が發揮されて居ることは疑はれない。社會的文化的及び歴史的諸過程に於ては、反復されない、單獨的な諸方面が存在し、かくて多くの單獨的諸特性は、確かに見出されるのである。されば其等の諸過程の單獨的非反復的諸特性を特有の對象として之を研究するのが、即ち一切の社會的文化的歴史科學の任務であると解されるに於ては、方法論上之に對して異議を挿む理由は毫も存在しない。併し其等の歴史科學に於て單獨主義的立場を主張する人々は、多くは社會的文化的及び歴史的諸過程の再起性、反復性を全く否定して居る。そうして其の點に於て彼等は大に謬つて居るのである。確かに何れの社會的文化的及び歴史的過程或は現象も、單獨的方面或は特性を具有して居る。併し夫れと同時に又再起的反復的方面或は特性をも併有して居る。かくて一の意味に於ては、社會的文化的的生活及び歴史は決して反復しない、單獨の一度的なものであるが、併し夫れと同時に他の意味に於ては、或範圍までは常に反復するものである。されば社會的文化的過程或は現象の單獨的方面或は特性の研究が、科學的に正當であるのと全く同等に、夫れの反復的方面或は特性の研究も、科學的に正當である。前者の研究に力を集注する何れの科學とも全く同等の權利を以て、後者の研究に専ら力を注ぐ科學が成立し得る、否な成立せねばならないのである。然らば社會的文化的諸過程の再起性或は反復性の諸特質は如何なるものであるか。

(3) 社會的文化的諸過程の句切り及び脈動 *punctuation and pulsation.*

今若し與へられたる過程の單位及び一切の方向が、夫れが存在を通じて變らずに存続するならば、夫れは如何なる「句切り」も、「回轉」も、「調子」も、「位相」或は「階段」も、「連環」も、「拍節」も、「律動」も全く有しないであらう。夫れの諸方向が總ての「向き」に於て變らないと云ふことは、本來夫れの一部を他の部分から區別する何等の句切り或は合ひ間も存在しないことを意味して居る。かゝる過程は、夫れが存在を通じて絶へず、又何等の變化もなしに、續いて行く樂譜、又は其の全長を通じて絶對的に一樣的にして、全く區分されない一直線に比し得られる。されば何れの過程に於ても、眞實なる句切り或は脈動が存立する爲めには、其の過程の何れかの方向に於て、又夫れの何れかの向きに於て、變動の行はれることが必要である。要するに過程の何れの句切りも、常に夫れの諸方向の、又其等の諸方向のもろくの向きの、一又は幾多に於ける變動の結果であるのである。

されば例へば時間的方向が、夫れのもろくの向きに於て恒定不變であるならば、如何なる時間的句切りも、律動やテンポの變化も不可能である。併し時間的方向が變動するや否や、過程は直ちに經驗的に存在する幾多の連環や、位相或は階段や、調子や、律動に分たれる。同様に量的方向が何等かの變動を示すや否や、過程は句切りされたる諸部分に分たれる。又過程の質的方向が變動する時も、夫れは幾何かの階段或は位相或は部分に分たれる。そうして總てかゝる場合に於ては、句切りは人爲的に外から押しつけられるのではなく、過程其物の中に存在して居るので、夫れが正當に了解される時には、其の過程の眞實な脈動を充分に表示するのである。

今右に説述せる原理からして、もろくの社會科學に於ける多くの重要な問題に對して、重要な意義を有する左の如き諸結論の一系列が引き出される。

A. 與へられたる方向に於ける一の過程の變動が鋭いほど、此の方向に關する限り、其の過程の變化は益々大である。

B. 他の諸條件が變らないとすると、二つの方向に於ける同時的變動は、之等の方向の只何れかの一に於ける同等の變動よりも、一層著しく過程を句切りする。

C. 右のA及びBの二命題からして、左の如き結論が引き出される。即ち同時的變動が起る一の過程の諸方向及び夫れのもろゝの向きの數が大なるほど、又其等のもろゝの方向及び向きの各々に於ける變動が深いほど、或は鋭いほど、其の過程が受ける變化は愈々大にして、且つ其の變化は益々容易に觀察され、了解されるであらう。そうして此等のA、B、C三命題の本質的意味は左の如くに公式化し得られる。即ち與へられたる過程の各々の句切りの深さ、大さ及び鋭さは、其の過程の同時的に變動する方向の數、及び其等の方向の各々に於ける變動の鋭さに正比例するのである。

D. 過程が行はれる單位が最早同一化されなくなる時には、其の過程は終つたと見做さる可きである。かくて運動が行はれる單位其物の變化、夫れが變動する方向の數、及び其等の方向の各々に於ける變動の鋭さ等に従ふて、過程は最も表面的な振動、連環、位相或は階段から、時期、世紀、時代、紀等までのもろゝの句切りの長い一系列（單位が最早同一化され得なくなるまで、總ての方向に於て行はれたる根本的變化が、遂に過程の終りを表示するに至るまで）を保有するのである。

但し過程の始めと終りは最大最後の句切りであるから、此處に夫れに就て尙ほ少しく述べて置くが、過程中にある單位が同一化し得られる限り、過程は夫れの諸方向に於ける一切の變動に拘らず、存在を續けて行く。そうして其の單位が最早同一化されなくなるまで變動する時には其の過程は終つたのである。單位の同一化が不可能となる瞬間は、過程の終はる瞬間である。そうして吾々の知識の及ぶ限り、以前に存在せざりし新しき單位の發現を見る瞬間に、吾々は新しき過程が始まると見るのである。尙ほ此處に單位の諸種類及び過程の持續に就て注意すべき點がある。此の點は既にアリストテレスが注目して居たものにして、彼は或循環的再起或は反復に於ては、同一の單位其物が繰り返されて居るが、他の循環的再起或は反復にありては只種Speciesのみが（同種の様々な死滅する個體によりて代表されて居るとして）繰り返されて居ると云ふて居る。そうして今此の原理を吾々の場合に適用すると、吾々は單位が屬（Genus）、種（Species）、又は亜種（subspecies）である處の有限的な再起或は反復の過程から、其の屬、種、又は亜種の個體が單位である處の有限的な再起或は反復の過程を、區別せねばならぬ。更に又屬、種又は亜種が夫れ夫れ單位である處の再起或は反復の過程を、夫れ夫れ區別して考へることが肝要である。かくて吾々は過程の始めと終りに就て、過程を左の如き四部類に區別することが出来る。

第一部類＝單位が同じ個體或は個人である處の、再起或は反復の一系列の始めと終り、

第二部類＝單位がもう一つの個體或は個人から成立する亞種である處の、再起或は反復の一系列の始めと終り、

第三部類＝單位が幾多の亞種から成立する種である處の、再起或は反復の一系列の始めと終り、

第四部類＝單位が幾多の種から成立する屬である處の、再起或は反復の一系列の始めと終り、

但し分類の性質に従ふて、部類の數は右の四者よりも少くないことも亦多いこともあり得るが、何れにして吾人は第一部類の過程から第二、第三、第四等の諸部類の過程へ移るにつれて、一般に過程の持續或は持續期間は組織的に増大するのである。かくて研究者は毎時、自分は持續の如何なる種類、かくて再起或は反復の如何なる種類を取扱ふて居るかを、即ち個人或は個體が單位である處の、或は亞種が、或は種が、或は屬が單位である處の、過程の持續及び再起或は反復を取扱ふて居るかを、明かに意識して居ることが肝要である。通常個體或は個人に於て行はれる再起或は反復は、其の個體或は個人が屬する處の亞種、種及び屬に於て行はれる再起或は反復の中に含まれて居るが、併し各部類の再起或は反復は、其の部類中の從屬的諸部類の過程の中や、最小單位たる個體或は個人の過程の中に必ずしも現存して居るのではない。

以上論述せる處によりて、吾々は過程の諸要素、夫れが行はれる單位、及び夫れがとる諸方向等を論理的に展開することによりて、過程の基本的性質を闡明し、又之れに基いて社會的文化的諸過程の現實なる句切りの體系を發見することが出來たのであるが、今此處に注意す可きは、經驗的現實態に於ては、社會的文化的諸過程の何れも、他の諸過程から離れ、孤立の状態に於て存在するのではなく、少なくとも時間と空間とに關しては、他の諸過程と解きほどかれ難きほど大に纏れ合ふて居ると云ふことである。尙ほ夫れに加へて、多くの社會的文化的過程は相異なる種々の律動及び脈動を有つて居るのである。夫れよりして其等の過程の結合は、判然辨別されるリズム及びテンポを有するシムフォニー *symphony* を生ぜずして、相互に相殺し、中和し合ふ處の、同時に演奏されたる相異なる種々のリズム及びテンポから混成されたるケコフオニー *cacophony* を生ずるのである。



そうして夫れが爲めに、與へられたる過程に於て、只夫れの諸方向中の一の變動によりてのみ作られる句切りは、パンクチュエーション屢々吾人の注意を逸脱する。さればかゝる事情の下に於ては、其の過程の諸方向中の二つ三つ或は四つに於ける同時的變動によりて作られる累積的な句切りの方が、右のケコフオニーの諸脈動よりも注意され易いのである。社會的文化的生活の無限に複雑な諸過程にありては、より單純な脈動が吾人の注意を全く惹起しないのに、其等の累積的脈動が判然了解されることが屢々ある。そうして其等の累積的脈動は、通例一の時代或は紀の特に重要な、又永續的な運動を表示して居る。されば吾々は其等の累積的脈動或は句切りが、吾々の耳を聾する喧騒な、錯雜な歴史のケコフオニーの中に没却されない爲めに、大に之れに耳を傾けねばならないのである。勿論此の事は、より單純な脈動は、社會的諸過程の紛糾中に於て方向を見定める爲めには、無用であるとか、時間、空間、量及び質等を表示する脈動を別々に研究するのは、無益であるとか云ふことを意味するのではない。否な總て此等のものは甚だ重要であり、又有用である。併し夫れに加へて累積的諸過程の研究は、非常に重要であり、又更に一層有用であるのである。

此處に注意す可きは、經驗的事實を基礎とするのではなく、只一の理論のみを基礎として純人爲的に時代を區別することは、現實態に於ける諸過程の諸階段及び夫れの再起或は反復を研究する爲めには、全く無用であると云ふことである。かゝる句切りの仕方は、社會科學にありては、歴史的或は經濟的或は政治的或は其の他の諸過程に屢々應用されて居る。尙ほ又夫れは人爲的な平均數や、正中數が器械的に作成されて居る幾多の統計的研究に於て、大なる度合まで使用されて居る。併しかゝる人爲的な循環や、調子や、律動や、句切りは、現實な脈動を記述するものでなく、夫れと全く何等の關係をも有しないか、又は只遠い關係を有するだけに止まる或物を記述するに過ぎない。かくて其の認識價值は甚だ制限されて居る、否な屢々全く存在しない。狭い經驗的展望を有するだけの多くの學者にありては、社會的文化的諸過程の句切り及び脈動の問題は、かゝる問題は社會科

學者が自から故意に之を求めるに非らずは、決して自然に起つてくるものではないと云ふ意味にて、あまりに抽象的な、又さし迫つて解決を要するものでない様に思はれるかも知れない。併しかゝる見解の誤謬は特に論辨する必要もない程であると思はれる。實際上此の問題は社會科學者が日々直面して居るものである。例へば經濟學者が景氣の變動の研究に、又人口學者が生命過程の研究に、又犯罪學者が犯罪運動の研究に着手するや否な、直ちに此の問題に打突かるのである。

ソロキンは社會的文化的過程の概念を、夫れの諸要素、夫れの諸種類、夫れの單獨性或は再起性、反復性の性質、并に夫れの句切りの諸基礎及び諸形式等に就て、以上述べ來りし如くに詳しく規定したる後、終りに方向の立場から見て、過程の線狀的なもの<sup>ベタインズ</sup>の型、及び非線狀的な、即ち循環的な<sup>サイクリカル</sup>及び變易的に再起反復的なもの<sup>の型</sup>の型を詳しく分類して論究して居るのであるが、夫れが即ち私が本論文に於て社會的文化的變動の形式と稱するものの論究に該當するのであるから、是れより其の論究をやゝ詳しく考察したいと思ふ。併し紙面の都合により次號に譲る。